

加賀乙彦

風と死者

乙彦

風と死者

風と死者

著者加賀乙彦

一九六九年七月二十五日初版一刷発行

発行者竹之内静雄

発行所筑摩書房

東京都千代田区神田小川町二一八（〒一〇一―九一）

電話東京二九一―七六五（振替東京四一二三）

井村印刷 山晃製本

装幀者斎藤寿一

©一九六九加賀乙彦

CS 80045

定価六八〇円

目次

くさびら譚

3

車の精

69

ゼロ番区の囚人

123

風と死者

199

くさびら譚

その病院に、先生と呼ばれている患者がいた。

先生は解放患者であつた。つまり、院の内外をかなり自由に歩きまわる特権を持っていた。大抵は青い、囚人服のような作業衣を着、塗りの禿げた胴乱を肩からさげ、古びた麦藁帽をかぶつて近隣の山や森にでかける。食事時には几帳面に戻つてき、食後配給される煙草を二本立続けにふかしてから又いずこともなく姿を消した。

ちよつとみたところ先生には狂人らしいところはほとんど見当らなかつた。日焼けてはいるがいかにも上品な面立、人なつこい微笑、尋常な応答。そこで新前の看護人などは「あれでどこが悪いのかねえ」と訝しがるのであつた。

先生の病室は、病棟のはずれにあつた。患者用の卓球室を改造したその部屋はそれ相應の広さであつたけれども、壁をうずめる書物の山やファイリング・ボックスや大小様々な実験器具や寝台や衣裳戸棚で足の踏み場もないほどであつた。しかし、雑然としているわけではなくど

ことなく或種の秩序があつて、まるで大学の医学研究室のような威厳と活気を備えていた。実際、先生はその部屋を研究室と称していたのである。

研究室の扉の鍵は三つあり、先生と主治医と先生お気に入り、掃除婦——彼女も患者であつた——の三人が一つずつ保管していた。そのほかの人間は、たとえ院長といえども研究室に入ることは許されなかつた。

そうはいっても先生は患者は患者なのである。外出する時は金は持たず、食事は病人食を食べ、入浴は週一回だけ、医者の方方した薬をのみ、等々、すべて一般患者と同じ待遇をうけていた。週末の定期診察に先生は主治医のもとに呼びだされる。すると先生は看護婦のうしろから患者らしくおずおずと診察室に入つて来た。

「お元気ですか」と主治医が言う。

「ああ、元気じゃな。とても元気じゃ」

「何か御入用なものはありませんか」

「今のところはないな」

「何か病院に対して御不満はありませんか」

「今のところはないな」

「誰かに会いたくありませんか」

「誰にも会いたくないな」

「先生」

「なんだ」

「御仕事はうまくいってますか」

「ああ、とてもうまくいっとる。おかげさまでな」

「先生」

「なんだ」

「先生は幸福ですか、今」

「もちろん、とても幸福じゃ。おかげさまでな」

「それじゃ、結構です。お帰り下さい」

「さよなら」

それで診察は、少くとも公式の診察はおわりである。主治医はカルテに「精神状態著変なし。落着いた日常生活」と書きこむ。数分後には野外散歩の身振をした猫背の老人がにこやかに微笑しながら窓の外を森の方向へと歩いていくのが見える。いかにも充ち足りた悠然とした足取りで先生は去っていった。

先生は、私の大学生時代の恩師であつた。学生の頃から、精神とか神経とか、いうならば脳をめぐる領域に学問的興味をいだいていた私は、医学部付属脳研究所の朝比奈教室、すなわちわが先生の主催する神経病理学研究室に時々出入りしていたのである。

学生の私には、もちろん本格的の研究にたずさわるだけの知識も技術もなかったから、はじめ私がそこでしたことといえば、解剖図譜を傍に脳のホルマリン漬を眺めたり、脳の連続切片標本を顕微鏡で調べたりという、ごく初歩の勉強なのであつた。助手や副手のいる大部屋の片隅で、私がそういった勉強をしていると、時々朝比奈教授が見廻りに来る。すると私は身内がふるえるほどの緊張をおぼえるのが常だつた。

なにしろ朝比奈教授といえば、日本の誇る世界的な神経病理学者であり、アサヒナ型とその名を冠した老人性脳萎縮症の発見は、学生の私でさえ知るほどに有名なものであつた。

白衣の先生は、後手に組んだ指先をひらつかせながら教室員の後を歩く。時折、顕微鏡をのぞいて何か一言二言いう。それに対して若い助手が尊敬こめたまなざしで答える。先生への質問もそんな機会に行うならわしであつた。先生の回答を、教室員全員が耳をすまして聞いた。

何か崇高な宗教的儀式でも取行っているかのような空気があたりに充ちたのはそんな瞬間である。

しかし、片隅で小さくなっていた私には先生もともと気付かなかったのであらうか、私は先生から物を言われたこともなかったし、私のほうも大先生に直接質問するほどの度胸もなかった。もっとも私のしていたような初歩的な勉強なら、新入の助手に教わる程度で間に合っていたが。

そして二年ほどが経った。さして熱心に研究室通いをしたわけではなかったのに、それでも私は門前の小僧で組織標本の作り方や染色の技術ぐらひは習得していた。卒業したら、神経病理学を専攻する学者になろうかと真剣に考えることもあった。

或る日、私はミクロトームの刃の研ぎ方をおぼえたいと思った。わけは単純で、私はその滑かな銀色の刃面^{はづら}に魅せられてしまったのである。ミクロトームの刀身は油をひいた溝の上を軽やかに移動した。ゆがんだ小さな天井の格子や窓枠が滑っていく。と、鋭い刃が半透明の脳の薄片をさつと削ぎ落す。脳という未知の暗黒の、しかし精妙に発達した有機体がミクロトームの一振りで瑞々しい断面を白日のもとに曝け出す。そのことは、何か私の未来を象徴する出来事のように思えたのである。

しかし、私の希望を大体は寛大にききとどけてくれていた助手連もこんどは首を振った。ミ

クロトームの刃研ぎは教室の最古参である老副手の神聖なる仕事になっており、助教授の花井先生でさえ手出しを禁じられていたのである。私はおとなしくあきらめるべきであつたろう。が、私はまさに血氣盛の年齢にあり、しかもその頃神経病理学を一生の仕事としようと考え、その教室でおぼえられることはすべて学ぼうと氣負つていた。そこで、思いきつて教授室のドアをノックしてみたのである。

「ああ、きみか」

「荻野です」

「知つとる。知つとる。まあかけたまえ」

部厚い洋書に埋もれて机に向つていた先生は、老眼鏡をもぎとつた目を眩しげにしばたきながら私を見上げた。私は手短かに用件を話した。不思議に私は先生に怖れを感じなかった。先生は、それならば、何故老副手に教えてもらわないのかと言つた。

「頼んでみました。でも教えてくれないのです」

「本気で頼んでみたのかね」

「本気で頼んでみました」私は狷介な老副手の顔を思い浮べた。「そうしたら彼は、自分ひとりに教えた経験がないというのです。昔、先生に教えていただいた通りやつてただけだつていってました。だから……」

「あの男がそんなことを言ったかね。あの男が」先生は愉快げに笑った。

「だから、先生、直接ぼくに教えて下さい」

「よわったな。きみ。よわった。なにしろぼくももう二十年以上もやっとなのだ。研ぎ方のこつなど忘れてしまったよ」

「じゃ、ぼくは誰に教わったらいんです」私は先生を見据えた。あとで悔いたことだが私の心には自分の年の二倍以上の老人をからかうような気持もあった。

すると先生は声をひそめて私の肩をたたいたのである。

「きみ、今夜、九時過ぎにみんなが帰ったらぼくの部屋に來たまえ。そしたら教えてあげよう。いや、きみ、ほかの連中に知られるとはずかしいんでね。きみ、こっそり来るんじゃない」

その夜、話声がばかに大きく反響するがらんとした研究室で、ミクロトームの刃をにぎった先生の手は精密機械のように規則正しく往復していた。

「いいかな。ほれ、こういう具合じゃ。ほれ、こういうふうにな」

細くしなつた指は刃面の要所をびたりと押え、老人にありがちなふるえの兆候すら示さなかった。砥石は吟味しつくされた極上品である。荒磨ぎ用には京都の青砥と中山の合砥あわせとが、仕上げには名倉砥が揃えられていた。

「さあ、やってみたまえ」

先生から渡された練習用の刃を研ぐようながされたとき、私の手はどうしても動かなかった。先生と私との間には越えられない、否、越えてはならない距離があった。私はそのことを悟ったのである。

「なんだい。できんのか」

先生は刃を取上げると、小鼻に汗を光らせながら研ぎ続けた。

私は定期的に、ほとんど毎日の放課後を研究室で過すようになった。小さな研究テーマを一つもらい、いっぱいしの研究者づらをばして教室に出入りしたのである。以前にも増して朝比奈教授を尊敬はしていたが、先生の傍にいても不必要な遠慮や緊張を覚えずにすんだ。おそらく先生へのこんな心安い気持が私をしてやや無遠慮な態度をとらせたのであろうか。そして、私が頻繁に教授室を訪問することが花井助教授の反感をかったのであろうか、或る日ちよつとしたトラブルがおこった。

その日、教室員全員が集り、翌週の学会の予行演習を行った。学会への出題者が本番の時と同じ要領で自分の研究成果を講演し、教授が講評を加えるのである。ひとわたり教室員の発表がおわったところで先生が演壇に立ち、特別講演の模擬を行った。それは、アサヒナ型脳萎縮症についての内外の学者の追試を総括したもので、先生の業績の真価を証明するものであった。世界中の追試者の九割までがアサヒナ学説に賛同している様子が諸雑誌の顕微鏡写真や図表の

プロジェクトで紹介されていた。資料はすべて教室員が分担して調査にあたったものである。ところでたまたま私の調べた文献の中に、アサヒナ学説を全面的に否定したものがあつた。すなわちアサヒナ型脳萎縮症は、昔からよく知られているピック氏病の亜型にすぎず、そんなものはアサヒナの論文以前にすでに十数件も発表されているという。私は、その論文の文献目録を指標に十数件の反アサヒナ的研究をも探しだして先生に提出しておいたのだつた。だから、先生がどのような論駁をこれら有力な反論に加えるかを私は待っていたのだ。ところが、意外にも、いや、なさけないことには、先生は講演の最後まで一言も反論に対しては言及しなかつた。私は、自分の努力が無視されたことに失望し、さらには先生の学者的良心への疑惑をいだいた。私が発見した論文を反対論者の数に算入すればアサヒナ学説の支持率は九割から六割へと減少するはずではないか。それなのに……

さかなな拍手が鎮つたとき、私はさっそく手をあげ臆面もなく自分の疑問をなげつけた。一学生の大胆な発言のおかげ、たちまち座は白けてしまった。みんなが演壇上の先生を注目する。と、先生をかばうように助教の花井が立上つた。この浅黒い大頭の男は、どんな場合でも押殺したような低い抑揚のない声で喋つた。

「先生にむかつてこういう質問の仕方は非礼ですよ」

「でも事実です」私は若かつた。すぐ熱くなつた。

「それはどうですか。あなたが事実といっている事柄のなかには、すでにあなたの判断が入っている」

「それはそうですけど」

「すると、事実ではなく、あなたの判断ともいえるわけでしょう」

「待って下さい」私は落着いているつもりだったけど声はすでに甲走っていた。「アサヒナ学説に反論を加えた論文は実在するのです。現に……」

「いや、あなた、そんな論文は誰だっけ知ってますよ。ぼくたちは専門家なんですから」

花井は平坦な低い声で論理的に述べた。その反論者であるアメリカの学者は、業績数だけが多いがひとつとしてまともな仕事のない流行学者であること。従って彼のセンセイショナルな発言には誰一人信頼をおいていないこと。そんな学者の論文の名を口にするこゝろさへ穢わしいこと。

「わかりました」と私は唇を噛んだ。言い負かされたくやしさと顔が火照っていた。

「まあ、花井君いいじゃないか」と先生が言った。「荻野君のいうことにも一理ある。彼の指摘した文献を引用したうえで、今、きみが言ったような反論を加えるべきだった」

「しかし……」

「まあ、いいじゃないか」